

やさしい、風

編集責任/ボランティアコーディネータ：大西ク宮子

編集協力/キートスボランティアさん達

早いもので、もう年度末です。年齢に比例して、一日のスピードが速くなっています。これが重なって1週間、1週間が重なって1カ月・・・1年なんてアツというまです。子育て中は、子供が早く大きくなって楽にならないかな、と思っていましたが、子供が手を離れると時間のスピードは本当に速い。それに反比例して、脳の海馬の反応が遅くなっています。(海馬とは記憶をつかさどり、女性ホルモンが伝達の仲介をします。女性は閉経と共に女性ホルモンが減るので要注意。)そこで、私と共に皆様の海馬をきたえる話をご紹介します。

「遊歩道」から (シルバー新報 1006号 環境新聞社発行 引用)

▽三好春樹氏の近著「希望としての介護」の中に、『御利用者様の気味悪さ』という1文がある。「御」と「様」と丁寧語が2つあり日本語として正しくないという指摘はごもっとも。これが介護保険になってからの風潮である。(中略)

▽「公的な制度にもとづくサービスだから、利用者側にもある程度の節度は必要。様はおかしい。利用者さんでいい」とインタビューに応じた介護経営者が言っていたが、原稿本人チェックの段階であっさり削除してきた。どうやら言い出しにくい雰囲気が業界にはあるらしい。

▽がっかりしていたら、以前デンマーク福祉政策に詳しい知人がこの問題を取り上げて「お客様が上で、ヘルパーは下。そんな環境で働く日本人の介護職は気の毒」と話した。利用者が上から目線では処遇改善もあったものではない。介護保険の根っこからの問題提起といえる。

注 三好春樹

福祉界のカリスマ。綾小路きみまろ的存在。かなり熱心な追っかけファンが多数。

私も時々、ボランティアの勉強で、研修に行くと「ご利用者様」という方に出くわします。その時は「??」でしたが、私の「？」も的外れではなかったなと納得しました。そう呼ぶ人は、大体有料老人ホームの方だったりしますが、最近はそのような傾向があるようですね。

では、Voはどうでしょうか？入居者さんとは対等な立場です。ただ、人生の先輩であるという気持ちで接することを忘れないで下さい。つい親しくなって、名前を～ちゃん、と呼んだり、上から目線でしゃべったりはやめて下さい。特に認知症の方の多いユニットでは、ちょっとしたことがきっかけで部屋の雰囲気がざわつきます。するとみんなが不安、不穏になり元の平穏な状態に戻すのに時間がかかります。必要以上にへりくだることはありませんが、ちょっとした言葉使いがキーポイントになります。

次にご紹介しますのは、霊安室のお話です。キートスには「星の間」という部屋が死体安置所になります。普段は和室で、縫物Voが利用しています。入居者が亡くなると、ここでお別れ焼香をします。いつも使うところ、人のいる場所でお別れ焼香をするのは温かみがあっていいな、とキートスで働き始めて思いました。

変わる霊安室 ～施設設計の現場から 残された人を癒すために／桑野隆司、吉田由紀

(シルバー新報 1006号 環境新聞社発行 引用)

1年で、死亡者の80%が病院で亡くなるということは、100万人が病院から旅立たれる。病院の最上階にあえて霊安室を設け、展望が豊かで光あふれる環境の中で亡くなった患者さんを旅立たせたい、という思いがあった。霊安室は医療側の遺体の引き渡し場であるが、家族、患者側は「よく生きること」「人間の尊厳」に敬意を表す場-スピリチュアルスペースとしての意味があります。亡くなった方への配慮が残された方々への配慮に行きつくのです。映画「おくりびと」での故人への敬意を込めた所作が、周りの人たちをとて癒



石畳を歩いて行くと大きな十字架にたどり着きます。長い道のりを歩くことで癒されていきます。



林の中に調和したお墓。
自然への回帰なのでしょう
うか？

すのだ、ということが良く分かりました。
海外でも様々な事例がありますが、やはり「故人への敬意を払うことが残された人を癒す」というスピリチュアルスペースとしての位置づけが共通しています。このため、建築関係者では「残された方々を癒す優れた空間を提供したい」と考える方が増えています。

特に優れたスピリチュアルスペースとして知られている場所はスウェーデン・ストックホルムにある「森の斎場／丘の十字架」です。(詳細はネットで検索してください)1917年から20年余りの歳月をかけて施工されました。1994年にユネスコの世界遺産に登録されました。

(2枚の写真はスウェーデン「森の斎場／丘の十字架」です。ネットにはもっと詳しくのっています。ぜひ検索して下さい)

次にご紹介するのは、キートスのボランティアさんにもこの方のように、積極的に、元氣

で楽しい活動をしていただきたいと思います。掲載します。

「60歳からの主張」23年度受賞作品

(発行公益社団法人 全国老人福祉施設協議会より引用)

小さな窓 優秀賞 藤原初枝・78歳・大阪市在住 現在特養老人ホーム非常勤として現在に至る

言い古された言葉に「読み」「書き」「そろばん」というのがある。今のお年寄りには概して「読み」に強い。午後1時過ぎ。今日もデイサービスに集まった、お年寄り30人余りの熱い視線を感じながら、私はボードに水性マジックを走らせる。「愛、概、餓、虐、旨、惜…」当用漢字から20字ほどを無作為に選んで書き出し、その「音読み」「訓読み」「2字熟語」当てていただく趣向の「漢字遊び」をする為である。「さあ、始めましょう」そう言った途端から、誰もが我先に答えようとする。收拾がつかない。熟語では、それにまつわるプライベートな話まで飛び出して、みんなを爆笑させるあり様。予定の1時間が終わっても余韻を楽しむかのように、一同は動こうとしない。この遊びは、彼らに日常生活での自信を取り戻す一助になれかしと願う、私独自の企画だ。まずは成功かなと喜びを噛みしめる。

私がこの道に職を得たのは18年前だ。その動機を振り返る時、更にその2年前にさかのぼる。当時夫は会社を60歳で定年退職していたが、ある日、私をねぎらうように言った。「長い間『内助の功』をありがとう。これからの人生は、お互い好きな道を歩こうよ」というわけで、夫は陶芸教室の門を叩き、私は、たまたま新聞広告にあった「社会福祉主事過程」を履修するため、大阪府社会福祉研修センターへ通学することになった。(中略)

社会主事過程修了式の当日、私はせっかくの知識を、老人福祉に活かせようとの志を抱いた。F特別養護老人ホームのデイサービス部門に職を得たのは、平成5年9月、私が59歳のときだ。巷で噂される老老介護そのものなのに、まさに幸運であった。始めはご利用者にどう接すればいいのか、試行錯誤の日々だった。60歳代になって私は確固たる信念を持つようになる。ややもすれば閉鎖的になりがちなお年寄りたちに、世間の涼風を感じてもらおう「小さな窓」的存在でありたいと…。(中略)私の年齢は78歳、現役である。が、60歳代で決意した「小さな窓」でありたいとの「信念」(主張)は、いまもなお脈々と私の心の中に生き続けている。

続きを読むたい方は大西まで声をかけて下さい

お知らせ

・ボランティア保険 3月で期限切れとなります。24年度保険の準備ができましたので、申し込みをして下さい。保険代500円の半分250円はキートス負担です。

・職員の移動 人事異動の季節になりました。4月に移動される方がバタつく季節です。キートスでは3月中旬の「キートス集会」で発表されます。担当がそれぞれ変わりますが、Voさんにはいつも通りの活動をお願いいたします。Vo担当職員が決まりましたら、いち早く当紙面を通じてお知らせします。実は私も担当が誰になるか、ハラハラドキドキしています。

・移乗布用綿毛布募集 移乗布とは体の弱い方の為の移乗に使います。ベッドから車いすに移す時、体をくむようにして2人がかりで移動します。これはキートスオリジナルのもので、作るたびに改良され、現在の形に行きつきました。芯に使うのは綿毛布がベストだそうです。綿毛布はダブるに重なったものでなく、一枚になった綿毛布を使います。ご自宅が使われない物(中古可)がありましたら、大西までお持ち下さい。